

Weather Side シーシャンティ

シー(sea)は海、シャンティ(shanty, chanty)は歌、帆船時代に大型の横帆船の甲板上で船乗りたちがうたった労働歌です。仕事の内容に応じて、主に3つのタイプに分けられます。第1は「ショート・ホール・シャンティ」、比較的短時間で素早くロープを引くなどの仕事をする際に歌ったものです。第2は「ハリヤード・シャンティ」、帆布を張るなど長い時間と重労働を必要とする際に歌われました。第3は、「キャプスタン・シャンティ」、アンカーを巻き上げる時など、長時間繰り返しの多い、かつ一定のリズムを要求されるような作業をする際に歌われました。

この他に労働歌ではありませんが「フォクスル・シャンティ」と言って、非番の船乗りたちが彼らの船室でくつろぎのひと時に歌った歌があります。バラッド風で、滑稽なもの、恋人や冒険、歴史上の人物などを題材にした歌の多いのが特徴です。

1. **Sailing, Sailing** traditional sea shanty, Org. Arr. by Roger Wagner

さあ出帆だ。日本丸演奏会のオープニングを飾るにふさわしい曲です。大型のバーク船（注：日本丸は4本マストバーク船です）が、お誂えの追い風に乗って波躍る大海原の彼方にある自由の国に向かって出航する様子を描いています。出航の前に、故郷と美しい女たちのために歌をうたおうと、胸は高なります。

2. **Erie Canal** traditional sea shanty, Arr. by Kobayashi Masaaki after Roger Wagner

アメリカ北東部にある五大湖の一つ、エリー湖の湖畔にあるバッファローの町とハドソン河畔にあるオールバニーの町を結んでいるのがエリー運河です。1825年の完成ですが、これによって西部への移住・開拓が盛んになったといわれます。そして当時、乗客や貨物を載せて運河を航行したのは数頭のミュール（ラバ）が曳くバージ（平底船）でした。

3. **Blow the Man Down** traditional sea shanty、編曲：篠田昌伸

横浜のプロバスケットチーム「ビーコルセアーズ」の本拠地開幕戦でも歌わせていただいた曲です。「奴らをぶっ飛ばせ」と応援いたしました。

19世紀後半、ニューヨークとリバプール間を就航していた高速定期船Black Ballerは船足が速く航海日数が短かったため、その分早く給料がもらえることで乗組員には人気がありました。彼等の多くはこのクリッパー船に乗ることを希望したそうですが、この船の船長は手荒なことで知られ、船上での規律を守るためとは言え、乗組員たちが甲板上で不当に殴打されることがあった、と云います。

(ハリヤード・シャンティに分類されます。)

4. **What Shall We Do with the Drunken Sailor?** traditional sea shanty、編曲：小林正明

錨を巻き上げるために、船乗りたちはキャプスタン棒を握り、甲板上で足を踏み鳴らしながら円を描いて前進します。その時歌われるのですが、朝っぱらから酔っぱらってしまった船乗りをどう始末したものか、あれこれと考えを吐露する、他愛無い、しかしユーモアのある歌です。

5. **Can't You Dance The Polka** traditional sea shanty、編曲：篠田昌伸、白石卓也

寄港地で出会う街の女と船乗りとの取り合わせは珍しいことではありませんが、ニューヨークに上陸し、ブロードウェイを歩いていたこの船乗りも女に声を掛けられ、場末の酒場でポルカを踊るだけのつもりが、ティファニーで金のイヤリングまで買ってやりながら、やっぱり騙されてしまった、というお話です。

(キャプスタン・シャンティに分類されます。)

6. A Roving traditional sea shanty、編曲：Roger Wagner

船乗りの一人がアムステルダムで港町で見つけた可愛い娘が、実は商売女で、あちこち二人でぶらついたあげく、財布の中はすってんてんになってしまった。もうお前と一緒にブラブラするなんて止めとくよ、と言いつつ、他の仲間に自分の轍を踏まないように注意を促している、と言った内容の歌です。

7. Shenandoah traditional sea shanty、Norman Luboff Choir より採譜

シェナンドー（シャナンドー）は、ヴァージニア州の北部を流れる河として知られていますが、この曲名の Shenandoah はミズーリ川の側で暮らすインディアンの酋長の名前という設定です。

一人の白人の男がシェナンドーの娘に恋をし、何とかして一緒に連れて帰ろうと、盛んに酋長に懇請するのですが、男の願いは叶えられず、失意のうちに去っていくという内容です。

8. Sally Brown traditional sea shanty、編曲：篠田昌伸

サリーは快活な混血女。明るくて美人、酒はいけるし、噛みたばこも嗜む。そのうえ、一人娘がいる。その彼女に心ひかれた一人の船乗りが、彼女のためならお金を全部使い果たしても惜しくはないと言いつつ、やっぱり、お前は大自然の中で暮らした方が相応しいと、その複雑な胸の内を歌います。

9. Rolling home traditional sea shanty、Norman Luboff 合唱団より、編曲：小林正明

第一部の最後の曲となりました。ローリング・ホームの名の通り、長い航海のあと、恋しい懐かしいニューイングランドに思いを馳せながら、帰途に就くときに歌われました。

スタン・ハギル氏によると、この歌は1858年にチャールズ・マッケイが帆船上で書いたもので、欧米の船乗りたちがフォクスルで盛んに歌ったそうです。また、一説には船乗りたちがキャプスタンで作業中に歌っているのを聞いたことがある、とも言われています。